史跡等を活かした地域づくり・観光振興

遺跡整備研究室では、遺跡整備に携わる行政担当者・研究者等を対象として、2017年12月22日に「遺跡整備・活用研究集会」を開催し、71名の参加者を得ました。

近年、地域づくりや観光振興において、文化財を活用することが当たり前のこととなってきました。国全体の動きとしても、歴史文化基本構想の策定や、日本遺産の認定等、文化財の総合的な活用に関する施策がますます推進されてきています。さらに、文化財の活用における弾力的な制度運用を目的に、文化財保護法の改正に向けた検討も現在進行中です。

文化財の保存活用の実務を担う、地方公共団体の中には、文化財をまちづくり等に積極的に活用するため、文化財担当部局を教育委員会から首長部局に移し、都市計画・観光部局との円滑な連携をはかったところもあります。いっぽう、小規模な地方公共団体では文化財担当者が少なく、積極的な取組をおこなうのは困難な状況も見受けられます。

以上をふまえ、研究集会では「史跡等を活かした地域づくり・観光振興」をテーマに、今年度から文化庁に設けられた地域創生本部の研究官である村上裕道氏に、基調講演として、文化庁の施策のこれからについてお話いただくとともに、５つの地方公共団体の文化財担当者から事例報告をいただき、文化財担当部局の組織や職務のあり方について、議論・情報共有をおこないました。

文化財の「活用」は、「保存」と対立するものではなく、人々の文化財に対する理解・愛着を深め「保護」に資するものとして、実施されていかねばなりません。今後も遺跡整備研究室では、遺跡の適切な保存活用のあり方について、調査研究を進めていきます。

（文化遺産部　高橋 知奈津）

総合討議の様子

古代瓦研究会シンポジウムの開催

都城発掘調査部・考古第三研究室では藤原京および平城京から出土する瓦の調査研究を主な業務としています。その一環として、古代の瓦を全国的な視野で検討することを目的として、1997年度より古代瓦研究会を主催しています。

この研究会では、古代における特徴的な瓦の型式をテーマとし（「藤原宮式」や「東大寺式」等）、その瓦が全国的にどのような展開を遂げているのか、各地域の研究者の方々にご発表いただき、総合的な議論をおこなっています。

この研究会の大きな特徴は、瓦の製作技法に注目した検討をおこなうため、毎回各地域の関連する瓦を会場に展示し、参加者に瓦を実際に手に取って観察していただいた上で、それをもとに議論・検討をおこなう点です。この企画は、各地域の瓦を一堂に会して比較検討できるため、毎回好評をいただいています。

今年度は18回目にあたり、2018年２月３・４日の２日間、「一本づくり・一枚づくりの展開１」というテーマで開催しました。これは、奈良時代を中心とする軒丸瓦・軒平瓦・平瓦の特徴的な製作技法に着目し、東日本におけるその技法の展開について検討したものです（来年度は西日本での展開を取り扱います）。従来、研究会の開催にあわせて発表要旨集を刊行していましたが、今回は旧国単位での状況を理解しやすくするために、174頁にわたる資料集も併せて作成しました。

今回は２日間で延べ247名にご参加いただき、極めて活発な議論がおこなわれ、盛会となりました。

（都城発掘調査部　林 正憲）

実物資料の見学の様子